

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」5月号 (通巻第12号)

2008年4月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

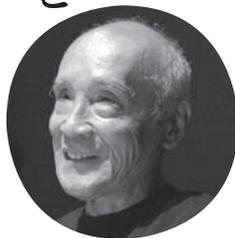
http://www.radiodays.jp

5

May Edition
2008, vol.12
Free of charge

この人の声が聴きたい◎5月 谷川俊太郎さん 詩人・翻訳家

詩人と出会うために必要なこと



最近四年半連れ添った犬が死んだ。連れ添ったとは、大げさな表現だが、ペット禁止のマンションに「かのじよ」を連れ込んで生活するということは、人目を憚って愛人と逃避行をしているような妙な緊張感があった。実際、会社の一室に私はベッドを持ち込んで、そいつと三ヶ月間寝食を共にした。ある日の夜、急に苦しがり、病院に連れて行ったが、その晩に一リットルほどの血を吐いて、「かのじよ」は不帰の存在となった。野良犬らしい死にかただった。

谷川俊太郎とお話するという企画が持ち込まれたのは、それから一週間後のことだった。困ったことになったと、私は思った。いったい、どんな顔してお会いすればよいのか。告白するが、私は谷川俊太郎の良い読者ではなかった。詩は好きだという以上の関心を持って読んできた。「現代詩手帖」と「ユリイカ」は、私の毎月の愛読誌であった。「荒地」派の詩は、私の思考にも、生活にも大きな影響を与えた。二十代とは、生活者になれないが、政治青年や、哲学青年や、文学青年にはなることができる特権的な季節なのだ。そして、谷川俊太郎は、私にとっては、詩的関心の焦点の中心から少し外れたところに、孤独な星のように輝いているといった存在であった。眩しすぎて焦点を合わせられない。谷川さんとラジオでお話するという機会を得て、すぐに思い浮かんだのは、『ネロ』という詩集であった。もちろん、自分の愛犬が死んで間もなかったということがあったからだが、それだけではない。最初に読んだ谷

川さんの詩であり、『ネロ』の中のいくつかのフレーズは、私の喉元に何十年の間ひっかかっていた。小骨のようなものだったからだ。今回再読して、私にはその小骨のような詩句がひとつひとつ腑に落ちていくのを感じるこ

とができたのである。
メゾンラフィットの夏
ウイリアムスバークの夏
オランの夏
そして僕は考える

人間はいつたもう何回位の夏を知っているのだろうか

(二十億光年の孤独) 所収『ネロ』より

難しいところはなにもない。子犬の死が想起させる人間の歲月。それでも、私はここに記された様々な夏が、何を意味しているのかわからなかった。後に、ご本人の書かれた解説(『私』はこうして詩をつくる) 創元社) を読んで、メゾンラフィットは、チボー家のジャック・チボーが過ごした場所であり、オランはカミユが『ベスト』で描いたアフリカの町であることを知ることになる。それなら私も知っている。知ってはいるが、それらの夏の日差しが、本の中から洩れ出ることにはなかった。いや、青年期が終わって、私に生活が始まるにからる数十年は、その感覚を忘れ去らせるには十分な時間だ。ドックイヤーなら三百年。しかし同時に、『二十億光年の孤独』の詩に出会うためには、短すぎる時間でもあったということかもしれない。

(ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美)

ラジオデイズは、文芸・対話・詩芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。
飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個人的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)にならると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りをお願いします!

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、絆々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小糸・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さん、江戸文化研究の田中優子さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる断家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る断家たち。ライブ音源だけに一期一会の断に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの断家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試験ボタンを。

オリンパスシンクろ寄席

【日時】5月17日(土)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
【場所】コア石響(四ツ谷駅徒歩7分)

すべての落語は新作として生まれ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、生き残ったものが古典になる……。それを自家葉籠中に演じきる現代の噺家たち！人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

入船亭扇辰

(いりふねてい・せんたろ)

入船亭扇橋に入門、平成一四年、真打昇進。平成十一一年と連続でつかん飛切り落語会で努力賞、一三年には奨励賞受賞。独特の乾いた泣きのある声で、べたつかない江戸前の語り口が粹である。趣味は、読書にギター。幅広い興味が嘶の地平を広げている。



古今亭菊之丞

(ここんてい・きくのじやう)

古今亭園菊に入門、平成一五年、真打昇進。二ツ目時代の平成一四年にNHK新人演芸大賞・落語部門大賞受賞。古典落語と真つ正面から向き合う若手真打のなかでも、ひときわ艶やかな江戸弁で多彩な表現力を持った華のある存在。趣味はカラオケ(懐メロ)、芝居鑑賞、日本舞踊(坂東流)。



明烏い話

連載第11回



本田久作



年寄りの落語ファンの中には志ん生文楽爺いというのがいて、何かと言うと「志ん生や文楽はよかった。それに比べると」と今の噺家を貶す。この人たちよりもさらに年上の人たちは「志ん生なんざ三語楼と円喬の物真似じゃないか」と言つて、円喬や四代目小さんを褒めそやし、さらにその上の世代の人たちは円喬はともではないが円朝の芸には及ばなかったと断言する。

この人たちの話が正しいとすれば、噺家の技量というものは時代を経るに従って落ちていくということになる。落語には進化論は当てはまらないのだ。映画ではこういうことにはならない。「ゴダールなんざしょせんヒッチコックには及ばない」と言う人もいるにはいるだろうが、それは多くの意見の中の一つであつて、そのことが定説になつたりはしない。それなのに落語ではどうあつても志ん生よりも円喬が上ということになっており、当の噺家自身すらそのように思つている節がある。文楽は自分の芸が昔の名人たちにまるで及んでいないことを正直に告白しているし、円喬もまた自分は師匠である円朝にはかなわないと言つている。当人が言つていることほど当てにならないことはない、とも言えるのだが、『あばらかべっそん』のそのくだりを

読むかぎりでは文楽は本当に心の底からそう思つていたようにみえるのだ。

この問題の一番困つたところは証拠がないことである。円喬の音源も残つてはいないが、あれでは円喬の芸の巧拙は判断できない。円朝に至つては声すら残つていない。幸いにも志ん生文楽はかなりの数の音源が残つているが、それでも年寄り連中は「志ん生なら甚語楼の頃が一番よかつた」などと言ひ出すから話はややこしくなる。言うまでもなく甚語楼時代の志ん生の録音など存在しない。

一つの芸や才能がある時期に頂点を極め、それから後は下り坂を迎えるということは実際にあつたし、ありえることでもある。私が聞くかぎりでも、ある特定のタイプの落語は志ん生で極め尽くされていて、それ以後の噺家は志ん生には及ばない。たぶんこれからも志ん生を超える噺家は出てこないだろう。だが、それで噺家の進化が止まつたのかといえ、そうではないように私は思う。ある系統のものが完成に近づくと、今度はそこから別の系統のものが生まれてくる。セザンヌやゴッホがある頂点を極めたにもかかわらず、その後からピカソは生まれてくるのだ。志ん生の落語が名人系の落語であるとするなら、その手の落語は志ん生によって頂点に達した、としてよい。だが、落語はそればかりではない。具体例を出すなら、初代の円遊(ステテコの円遊)がやろうとしたことは未だ完成されておらず、時代を遠く隔てて喬太郎や白鳥に受け継がれている。円遊も含めて彼らは名人と呼ばれることはないだろうが、名人芸とは関わりのない違うタイプの落語もまた落語であり、今はそういう落語の方が求められてもいる。百年後ももしも落語が残つていけば、喬太郎や白鳥は名人とは違う尊称を与えられ、

名人と同じかそれ以上の評価を得ているだろう。落語は一本の真つ直ぐな線ではなく、右へ左へと蛇行しながらそれでも徐々に上向きに進んでいるのだ。

●ほんた・きゆうさく

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇一二年の「仏の遊戯」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主筆受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞集優秀作)、「僕の葬式」(按摩の夢)、「幽霊妻」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讃大ばなし 拾貳

橘家文左衛門

き 『浮世床』

父親に連れられて、寄席通いを始めたのは小学校2、3年生の頃。ある日、ひとりで寄席へ行くことになり、そのときに初めて聞いた先代の柳朝師匠のこの嘶にひっくり返つて大笑い。すっかり魅了され、この日から柳朝師匠の追っかけに。落語にのめり込むきっかけとなつた嘶です。

式 『道灌』

入門して間もない頃に、「この嘶を覚えるなら、落語の基礎がすべて詰まつた先代の金馬師匠の流れを身につけるのがいい」と師匠(二代目橘家文蔵)の計らいで、弟子の林蔵師匠(先代金馬の弟子)に稽古をつけていただいた。前座嘶でも主任を取れると教わり、荒川の河川敷で大声を出して稽古をしたり、この嘶でみっちり基礎を学びました。

参 『子別れ』

トリのこん平師匠がお休みで、今は亡き円弥師匠が代演を務められたことがありました。こん平師匠目当てのお客様は、ざわついていたのですが、円弥師匠は我関せずで、この嘶を始めました。その熱演に客席は静まりかえり、前座だった私と萬窓さんも聞き入って涙をポロポロこぼしてしまいました。サゲと同時に客席からは割れんばかりの拍手。嘶のよさと噺家の力量を目の当たりにした嘶です。

春風亭栄助

(しゅんぷうてい・えいすけ)



春風亭栄助門下。平成二年二ツ目昇進。現在に至る。ロサンゼルスにあるスシバーの板前から噺家へ転身。趣味は「においかぎっこ」とや怪しいが、最初はイヤでもだんだん引き込まれ、ついにはやさしい気持ちを手繰り寄せてしまおうという。古典落語のDNA変換で世界を驚愕させる、やさしい国際派！

瀧川鯉橋

(たきかわ・りきよ)



瀧川鯉昇門下。平成十四年、二ツ目昇進。師匠・鯉昇の十八番である「時そば」などを巧みにアレンジし、既に自家楽籠のものとしてつある。出身地である新潟にまつわるマクラも、その人柄と相俟って味わいがある。趣味は、酒、煙草、エキナセア、天然塩、味噌、醤油、セイロン紅茶、将棋、国産そば、等々。

立川志ら乃

(たてかわ・しの)



立川志らく門下。平成十五年、二ツ目昇進。師匠譲りの心地よいテンポと、次々繰り出す突飛なギャグが爆笑を誘う。平成十七年、NHK新人演芸大賞を受賞。今年にはネタおろし四席の独演会を毎月開催し、立川談志の孫弟子世代で初めての真打を目指している。また、アニメ文化にも造詣が深く、自ら同人誌を発行するほど。

柳家わさび

(やなぎや・わさび)



柳家さん生門下。平成二十年、二ツ目昇進。師匠の名から菜味繋がりや粋な名前に。3月の二ツ目昇進披露興行から解禁になったマクラも楽しみのひとつ。音楽家の両親譲りの表現力も手伝ってか前座時代から心に残る高座姿との声も多く、今後も目の離せない存在。趣味は油絵、和裁、暗算。

ラジオデイズ 若手噺家の会

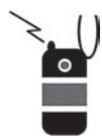
【日時】5月17日④午後2時半開演（午後2時開場）

【場所】コア石響（四ツ谷駅徒歩7分）

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑪

柳亭こみち



「体の弱い弟子はとった覚えがない」、ある日師匠から言い渡された。内弟子ではなく通いで修業した私。東村山の実家から江東区の師匠宅へ、東京を横断。毎朝5時起き。前座に休みはない。夜席に入ると睡眠時間は4時間を切った。いつも眠くてだるくて仕方ない。すぐ風邪をひく。いくら寄席で元気に働くふりをして、肝心な自分の師匠とおかみさんの前で弟子がかったるような顔ばかりしている。師匠の家へ置いてもらえるわけがない。今の修業に体がついていけないなら、クビってことだ。

睡眠時間を増やすしか解決策はない。「近くに部屋を借りて心を入れ替えて修業しますので、おそばに置いてください」と懇願。なんとか首は繋がったが、物件探しが多難だった。

当時の私の収入は、寄席の給金1日千円×30日で月3万円。家賃3万円のアパートを見つけたが、師匠が首を縦に振らない。「3万の家に住んだら、そういう芸人になっちゃうぞ」と。安い部屋に住み安い物に困

まれ安い生活を送ると、安い芸人になってしまふ。それが高座にあらわれる。そういう噺家にお客様はお金を払いたくないだろう。普段の食べ物が梅干しとお茶漬だけだつて、きちんとした部屋に住みきちんとした物に囲まれる、それが芸人、燕路イズム。じゃあどうすりゃいいのよ。私の物件探しは次号へと続く……。

●りゅうてい・こみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、香妻流名取（香妻香流）。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第12回

生死



松井高志

人の値打ちは死なねば定まらぬ、などという。これにちよつとばかりの品格を加えれば、

人の善悪は柩を蓋してはじめて知る

というような言いまわしになる。講談・赤

穂義士銘々伝の「木村岡右衛門」では、殿中刃傷のため断絶となった浅野家の家臣たちが、城を明け渡し離散する際、送別会を開く。ここで、宮原大学という者が、酔って主人公の木村にからみ、「こんなことになったのも、

そもそも殿様が短慮だったのだ。殉死もせぬ大石は臆病者、それを支持するおぬしはえせ忠臣だ」と罵る。濃厚な木村は、これも酒が

言わせる言葉かと堪忍し、「おぬしは酔っている。酔った者に何を言われても自分は腹を立てぬ。ここで弁解しても功はない、最後には、誰の目にも真実が分かるだろう」と答えてこの成語を引用する。その場はひとまず無事に収まるのだが……。杜甫の詩にもこのような一節があるらしい。

世の中の人の煙草のよしあしは煙こなつて後にこそ知れ

である。これは講談「祐天吉松」に引用されるが、いったんは大家の婿養子におさまったものの、ワル仲間だった立花金五郎の脅迫によって江戸を立ち退くはめになった主人公・吉松が、久々に戻つて来ると、周辺は火事にでもあったのか、町並みがごとごとく変わつている。彼はとりあえずかつての自宅の様子を、近所にできていた煙草屋で聞こうとする。その煙草屋の正面の障子に描かれた、達磨が煙草を喫んでいる絵の、煙の部分に描かれている店のキヤッチコピーがこれである。そこで吉松は、立花によつて舅姑や使用人が殺され、店には放火されてしまい、妻子は物乞いに零落したことを知る。

「人の悪行は死後まで残り、善行は骨とともに葬られる」（シエイクスピアの「ジュリアス・シーザー」のセリフ）というから、これらはアジアの「ローカル・セオリー」なのかもしれない。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く！ 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。四月に、落語講談速記に出くわるあて字・難読語をドリル形式にまとめた新刊「コナンDク【難読漢字自習帳】(ハジリコ)が発売されたばかり。『話芸』きまり文句。辞典。サイトは <http://wagendoin.coolog-rifty.com/>

ラジオデイズ

MANZAI NIGHT

【会場】ハーモニックホール(西新宿) 【本席】2500円
【時間】午後7時開演(午後6時半開場)

●第1回 6月30日(日)

ロケット団 米粒写経

ゲスト 柳家紫文

※ご予約申込受付中！ラジオデイズURL <http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話〇三三三四一三三〇より先着順です。

オリンパスシンクする寄席

【会場】お江戸日本橋亭 【本席】2000円

【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●第13回 6月18日(金)

二笑亭夢丸 二笑亭夢吉

※ご予約申込受付中！ラジオデイズURL <http://radiodays.jp>もしくは、予約受付専用電話〇三三三四一三三〇より先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定(深夜のお客様)

4月29日 浦 雅春(ロシア文学者)

5月6日 徳山喜雄(フォトジャーナリスト)

13日 楠美津香(楠流家元・女優)

20日 バッキー井上(ライター)

27日 谷川俊太郎(詩人)

卯月の落語会ひとつ

桜舞う土曜日の昼下がり、第二回ラジオ

デイズ落語会(四月五日)は、初登場三遊亭歌武蔵師匠と今をときめく柳家喬太郎師匠の出演で開催。超満員の会場は開演前から期待と熱気でムンムン。開口一番は柳家わさびさん。ゆるい芸で「だくだく」を好演。好き

だなあ、この芸風、育ててほしいね。会場が暖まったところで喬太郎師匠が登場、ネタは「たらちね」。大家の世話で言葉遣いが馬鹿丁寧な嫁を迎えた八五郎の運命や如何に？師匠の演じる女性はみんな可愛い。続いて巨漢歌武蔵師匠が土俵もとい高座へ。ネタは「子ほめ」。口の悪い男がご隠居に習った褒め言葉で一杯おごらせようとするが、付け焼き刃ははげやすいという

漸。喬太郎師匠の「たらちね」といい、よく知った前座漸も上手い噺家がやると笑える。芸の力だねえ。仲入りの後も歌武蔵師匠でネタは「長短」。もしも気の短い男と長い男が幼なじみの親友だったら、こうなるだろうというタワイモナイ漸がなぜかお

もしろいから不思議。両極端の人物を演じ分けてどちらも最高！という落語家はそうはいない。トリは喬太郎師匠で名人左甚五郎「竹の水仙」。毎日大酒を飲む長逗留の男。宿代すら払う気配がないので、心配した女将にせ

つつかれた主人が酒代だけでもと請求すると、金がないという。代わりにと彫った竹細工を花瓶に挿し水を張っておくと、翌朝花が咲いて水仙に。大名行列の毛利の殿様がこれを見て所望するが……。師匠の演技力が光り、甚五郎に後光が差すほどの存在感で心に残った。いや、落語ってほんとうにももしろいですねえ。(ラジオデイズ寺相尚)



「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載 <http://www.radiodays.jp>

内田樹と平川克美の東京ファイティングキッズコンビが多彩な論客陣と知的格闘技を繰り広げます。

- 大瀧詠一的(大瀧詠一)
- 概念化する世界の読み方(養老孟司)
- 果たして文学は何処へ行くのか(高橋源一郎)



温もりと味のある声のエッセイ/新鮮な詩の物語り

- 下町——粋と人情のワンダーランド(小沢昭一)
- 色街——華やぎの記憶を求めて(田中優子)
- 詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか(朗読:鳥丸せつこ/解説:正津勉)



鉄ちゃん噺家ふたりの愉快でディープな道中

- 小ゑん・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅



面白くて物凄、当世落語家の噺がいっぱい
三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志ん五、柳家小ゑん、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、三遊亭白鳥、三遊亭遊雀、入船亭扇辰、林家彦いち、古今亭菊之丞……etc.

ラジオデイズサイトようこそ!
※ご購入や無料ダウンロードには会員登録(無料)が必要です。

オリンパスシンクする寄席の"楽屋口(´O`)"

シンクする寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(´O`)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクする) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンク★の公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクする) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクする寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクする (Sync ★R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

「新緑が加わって御苑の緑が豊かになったね」暖かな日差しのおかげか、珍しく会話を交わしながら窓の景色を眺めていると、背後から「はっはっは」と大きな笑い声が……。陽気がいいからと仕事を怠けているわけではなく、収録した音源のチェック中なのです。皆様にお届けするための大切な作業ですが、落語が聞こえてくると、私もついニヤニヤとしてしまいます。